

## 一般書

### 国民精神総動員



#### 427 青年のための修養

伏見韶望 / 天泉社

本書はこの信念より、幼学綱要を経とし、畏くも 明治天皇御製、日本の先哲偉賢の言行を緯として、日本青年が天業の大恢弘に翼賛の誠を盡さんとする希願の一助ともなさんがために編纂したものである。(序より)



#### 428 日本人の本領

伏見韶望 / 天泉社

三千年の光輝ある歴史を有する神国日本  
その一頁一頁を飾つた輝く偉人の言行をこゝに網羅した  
これこそ日本人の魂の書である。

本書に依つて

新しい世界史への創造をねがふ著者の微意

いさゝかでも酌んでもらへるなら幸甚である。(序より)



#### 444 神社参拝

西嶋東洲 / 紙業出版社

輝く二千六百年奉祝の年に当り、各地神社に参拝して、奉祝の誠を捧げ国運の御隆昌を御祈りすることは、興亜新建設に努力を傾注しつゝある吾等国民の、二千六百年奉祝に相応しい記念事業の一つではあるまいか。(序より)

## 458 神国二千六百年史

大島正健 / 天泉社

本書は光輝ある二千六百年を迎へ、東亜新秩序の建設に邁進しつゝある一億同胞に呼びかけ、日本民族の真性を自覚せしめ、その向ふべき所を暗示せんとする用意の下に書いたものであるが、特に我国と大陸との関係を明かにし、古来我等の祖先たちが、海外発展のため如何に努力したかを審かにし、日本精神の高揚に重点を置いたものであるから、その形式の上から見るときは、在来の歴史とは大に趣きを異にして居るが、今の時、特に非常時下の日本国民としては、かくの如き歴史によつて、覚り得る所があるのではないかと信ずるものである。(序文より)



## 465 開拓血涙史

大政翼賛会北海道支部 / 長谷川書房

われ一粒の麦となつて北辺の原野に根を下さん、この人々が『錦衣帰郷』を戒めの言葉として産土の地を後に挺身、北門守獲の難に赴き、身を拓土に捧げて屯田兵精神に強く逞しく生きぬいた生涯は血と汗で綴られた活ける開拓戦記であり、北海道開化史の巻頭言を飾るものだ。(長谷川信治氏発刊のことばより)



## 485 広東百題

西晴雲 / 富山房

曩キニ刊行セラレタル、西画伯ノ「江南百題」ハ此種ノ書トシテ、所謂ル最善販売者ノト云フ可キニ幾カッタ。本書ハ其ノ続篇ニシテ、「廣東百題」ト称スルモ、其实ハ閩粵及ビ海南諸嶋峽ニ及ブ。実ニ南支ノ大観デアル。而シテ其ノ画題ノ变化ニ饒ミ、奇趣横生ノモノ、寧口前書ヲ凌グモノガアル。(徳富蘇峰序文より)



## 508 シンガポール

内藤英雄 / 愛国新聞社出版部

本書執筆に当つては、現在のシンガポールには、如何なる軍事拠点か横はり、その背後地にはアメリカの狂燥する無限の軍需資源が、如何に生産されつゝあるか等に重点を置き、著者が同地方三回目の旅行の見聞と調査事実に基づき、あるがまゝに書き記したつもりである。(序より)





### 513 蘭印現状読本

石沢豊 / 新潮社

若し機会あらば早きに及んで我が国民に対し、蘭印の全貌を公平なる態度を以て、偏せず片寄らず、有りの儘に紹介することは、数年来蘭印問題に没頭し来たれる著者の義務ではないかと考へて居たのである。幸ひに寸暇を得たので茲に新潮社の希望を容れ本書を執筆し、以て江湖の叱正を仰ぐ次第である。(序より)



### 531 若きドイツ

朝比奈策太郎 / 羽田書店

大日本青少年ドイツ派遣団長の重責を汚した私としては、ドイツに於て見聞したことや、体験したことを、出来る限り広く江湖に紹介して、彼の国に対する理解と認識とを、一層深めていただくことは、私の為すべき当然の責務であり、且主要なる残務整理の一つであるとも信ずる。(中略)

かうした理由により、曩に国民新聞の求めに応じて、同紙上に連載した印象記『訪独の旅を終へて』を基とし、これに修正増補を施したものを第一部とし、『ドイツ青少年運動』を第二部として上梓し、世に問ふことにした。(序より)



### 549 ソ聯極東軍は何を狙っている？ 暴かれた赤軍公文書

F. L. ミュドルハムメル / 東海出版社

本書の内容はボルシエヴィズムの根本的な、論理的な研究から成つたものではないが、五年半のソヴィエト滞在と、之に引続き、十四年間極東にあつた筆者の体験によつて生れたものである。(中略)

筆者はボルシエヴィズムの憎悪と破壊心理に対抗して、之を人類文化の世界から駆逐し、以て真の世界平和を樹立すべく各国民が一致団結すれば、必ずや実現するといふ確信を懐いて本書を執筆した。(緒言より)



### 552 \$の国アメリカ

芝染太郎 / 千峰書房

そこで、現在アメリカの掛け声の裏面に何物があるか、如何なる動機が潜在するか。又アメリカ人の口ずさむ正義とか、公平とか、国際道義などと云ふことは、抑も如何なることを意味するか。その正味正体を解剖して、錯覚人の目の前に指摘してみたいと考へて筆を執つた次第である。(自序より)

## 557 太平洋島の解剖

佐藤定勝 / 大同印書館

こゝに私は太平洋上に布陣する島々について、その成因から地理的、歴史的その他あらゆる角度から解剖してみた心算であるが、なほ資料の関係から十分に記述し得なかつたことを遺憾とするものである。しかし聊かたりとも本書が読者の参考になれば、私の望外の仕合せである。(まへがきより)



## 647 青年川原大尉

丸尾長顕 / 東京社

装幀 高澤圭一

これは小説ではない。

波瀾に富み、感激に充ちた物語であるが、飽くまでも真実である。真実以外の何ものもこゝには描かれてゐない。

後に軍神と仰がれた加藤建夫少将閣下から、初めて川原幸助大尉の話を受つたのは、蕭々と秋雨の煙る日であつた。愛する部下を語る少将の眼には一ぱいの涙が光つてゐた。(自序より)



## 648 日本海員魂

大沢卯三郎 / 日の出書院

級友菅源三郎君、日支連絡船長崎丸船長として乗船中、長崎港外に於て揃らずも機雷接触の一大不運に遭遇せる事は、寔に同情に堪へざる災禍であつた。然るに君は之を自己の責任なりとし、遭難に関する諸般の処理を完了せる後、一糸紊る処なく従容として自決したのである。真に惜みても余りありと申すべきか。(刊行の言葉より)



## 649 海の守護神菅源三郎

宮瀬睦夫 / 日の出書院

大東亜戦争勃発の際、東支那海上で、米国の汽船プレジデント・ハリソン号を追跡拿捕して偉勲をたてたのは長崎丸の船長菅源三郎であつた。然るにこの事があつて半年とたたない昭和十七年五月十三日、不幸にして長崎丸は不慮の触雷のため長崎港外で沈没してしまつた。菅船長は烈しい責任感から一切の処置を終つて後東亜海運長崎支店の一室で古武士の如く腹をかき切つて自決した。(序文より)





### 650 印度の巨象ガンジーとネール

鍋山実 / 新興亞社

私は、数年前から、印度に対して、大きい興味をもつてみた。最初、種々な文学書によつて印度を知り、これが端緒になつて調べ始めてから、印度国民が、全世界のどこの民族よりも、激しい圧迫と、悲惨な生活に生きてゐるかを知つた。この書の内容には、些かの誇張もない。むしろ、書き足りないくらいである。三百年間の、悲惨な、血と涙の印度四億万人の生活は、筆舌につくし難いものがあるのだ。(後記より)



### 672 大東郷

小笠原淳隆 / 潮文閣

現し身は、我々の眼のとゞかぬところへ消えても、恰も、アミーバが分裂し分裂して、幾百千万の異身にして同身たる生物を、無限に栄えしめるのと同じに、日々われわれの見聞してゐる一大生物となつて御稜威を護り奉つてゐるのである。「日本海軍」といふ大生物がそれである。

も少し、それを押し拡げて、「日本人」そのものが、東郷元帥の分裂生体でなければならないのだ、と私は信じてゐる。(はしがきより)



### 678 二宮忠八伝

関猛 / 日光書院

飛行機を最初に発明したのは、独逸のリリエントールであり、米国のライト兄弟であると言はれてゐる。しかし、これら外国の飛行機が世に現はれぬ前に、すでに我国では立派な飛行機が発明されてゐた。

二宮忠八氏の発明がそれである。二宮氏が飛行機の発明に苦心されたその努力は実に涙ぐましいもので、その独創的な考案は、世界最初の飛行機として誇るべきである。

そして、二宮氏の生涯は航空報国を以て終始し、我国の航空事業発展に多大の功績を残したのであるが、既にその発明の動機が、国家にとつて最も必要なる新しい軍器の発明製作といふ点にあつたことである。最初から軍用機の創案を目標として発明に努力したことは、後に欧米で飛行機が工夫されるやうになつた動機と比較して、全くその趣を異にしてゐる。(自序より)



### 686 農人乃木

木村毅 / 全国書房

装幀 荒井龍男

日本では、大山元帥でも、乃木大将でも、先づ武人であつて、そしてその次ぎには何であつたかと云へば、それは百姓だつた。この一面は農村青年には、特に親しみが深い。

有難いことに私は百姓の子だ。だから乃木大将の那須野の農事日記をよむと、あの簡略な記事の裏に、ありありと農人乃木の全貌を想像することが出来る。その感興をこんな小説にまとめて見たのだ。(自序より)

## 700 人間ヒットラ - 物語

ワード・プライス / 霞ヶ関書房

今や全欧州の地図を一変しつゝあるヒットラ - 総統！その伝記は幾冊か公刊された。が、本書の如く大胆に細部に亘つてその公私生活の全貌を描き出したものは断じて他にあるまい。総統に影の如くまつはる英貴族の令嬢姉妹はヒットラ - のロマンス？を物語り、ナチス最初のデモに將軍ル - デンドルフの腕を握つて先行するヒ総統、かと思へば愛犬の死に涙する総統。総統の真面目を映し得て余すなきは本書だ！（「南進日本」巻末広告より）



## 728 樺太風物抄

谷内尚文 / 七丈書院

オホツクに風が蒼い。  
島の人このころへ、  
野花が郷愁を撒いた。  
こな雪のやうに。（扉より）



## 737 南進第一歩

山田忍三 / 婦女界社

装幀 矢島健三

本書は、昨年南方観察をなし、帰朝後なしたる談話と時局放談等を集録したものである。

随つて、旧聞旧見雑然たるも、時局がら聊かなりとも諸賢に資する処あらば此の上もなき幸せである。苛厳なる御叱正を乞ふ。（序より）



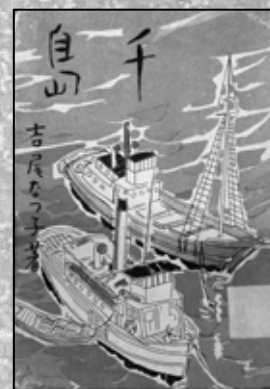
## 741 千島

吉尾なつ子 / 三崎書房

私はその頃、南方に緊迫する空気を無論知つてゐた。出来れば南方にゆきたいとも思つてゐた。

けれども、その機運に恵まれないうちに、北方行きを、ひそかに一人で計画するやうになつてゐた。云はば、北方に関する事情を日本人として知つて置きたいと願ふやうになつてゐたのだつた。

そして、さういふ決心がつくと、私は、その無謀を大半の人からあやぶまれながらも、单身小さな貨物船に便乗して、この千島探渉の決行を敢へてしたのだつた。（まへがきより）





### 750 アジアの太陽日本

ウェルネル・A・ローエ / 青年書房

日本が現在非常の時局に善処するためには、まづ科学者の冷静と精密とを以て、紛糾極りなき諸多の現象を明確に観察し、之に関する秩序あり系統ある知識を掴得せねばならぬ。(大川周明氏序より)



### 760 われ等の建設

アドルフ・ヒトラー / 青年書房

本書は一九三八年二月二十日、ヒトラー大統領がベルリンにて全独逸の国民社会主義黨員になした大演説の全訳で、ナチス政権確得以来最も多事多端なりし、三八年度に於けるヒトラー大統領の心構へが察知出来る。(安居憲太郎氏跋より)



### 765 昭和維新

松岡洋右 / 第一出版社

本書に収めたる二十六篇は、最後の「非常時に際して国民に懇ひ」の外悉く、政党解消連盟機関紙「昭和維新」に発表されたもので、茲にはその掲載の順序で収録しました。(編集後記より)



### 768 スターリン政権

吉村柳里 / 東京講演会出版部

ソ連研究に生涯を献げ、ソ連の表裏、明暗、強弱、一切を知り悉せる吉村柳里君が、今回蘊蓄を傾けてスターリン政権に関する研究を上梓されたことは、ソ連の実態と其の過去、現在、及び将来を考察する上に、必要欠く可からざる知識を提供されたものといふべく、警世の意図と其の労を多とするものである。(四王天延孝氏序文より)

## 770 近衛新体制の全貌

小田俊与 / 皇国日本新聞社

今日、新体制に関する書籍は決して少しとしない。併しその多くは一個人の主観に立つて論述されたものが多く、従つて局部的解説に止つて、真に新体制の全貌解説書として、読者に十分な満足感を与えるものは少いと思ふ。本書は凡ゆる資料を広範囲に亘つて収録し、而も「斯る新体制は何故に生れたか、また如何なる過程を辿つたか、将又如何なる方向に進むか」といふ重点を明かにし、新体制の理念とその内容を細大洩さず記述したところに、他の群書の企及し得ざる特色を備へてゐる。敢へてこれを江湖に薦むる所以も、実にこゝにあるのである。（「翼賛運動と近衛公」巻末広告より）



## 776 翼賛運動と近衛公

小田俊与 / 俊平書房

斯くして大政翼賛会の成立が、近衛公を中心として具体化したことは周知の如く、今後の発展も亦、公を枢軸として期待さるゝ処多きに鑑み、近衛公の構想と其の決意とを知悉し、運動の核心を的確に把握することが、時局に処する国民の用意でなければならない。（松岡洋右氏序より）



## 832 開拓団生ひ立ちの記

浅川四郎 / 海南書房

著者は牡丹江省の開拓課長、牡丹江に近き五河林開拓団の逞しき生ひ立ちと、民族協和の実状に非常なる関心を持ち、ありのまゝに入植時より現在に至る経過を良心的に描写した画期的報告文学である。（「我が血我が土」巻末広告より）



## 833 滿蒙開拓青少年義勇軍

朝日新聞社 / 朝日新聞社

この東洋史上の一大転換期ともいふべき重大なる時機に当り、私共は一刻も早く満洲国の基礎を固め、三千万民生の福祉を増進する一助として、昭和十三年に滿蒙開拓青少年義勇軍制度を創設し、純真にして剛健なる青少年を満洲国五族の中核として大陸に進出せしめることとしたのであります。（中略）特に本書が義勇軍に関し、細大漏さず解明して今後我が青少年の進むべき道を暗示せられたことは、極めて卓抜せる識見といふべきであります。（小磯国昭氏序より）







### 839 若き義勇軍

田村直治 / 東水社  
装幀 筒井直衛

国民の誰もが、青少年義勇軍の名称を知らないものはない。だが、その実態を知つてゐるものはどれほどあるだらうか。二十歳にも満たぬ、十万に近い青少年たちが、地下に英霊の眠る満洲の曠野にあつて、聖鏃をふるつてゐることを知つてゐる人はあつても、如何に苦闘をつゞけ、如何にして開拓といふ創造の日々を送りむかへてゐるかを知つてゐるものは少い。

私は青少年義勇軍が国策として決定されて以来、この若き大和民族の大陸大移動にふかい興味と関心をいただき、あらゆる方面から研究をすゝめてゐたが、文部省、拓務省共同主催の教学奉仕隊の一員として、満洲現地に直接この義勇軍を訪ねることが出来た機会に本書をつゞつた。(自序より)



### 861 家庭における子供の鍛錬

青木誠四郎 / 主婦之友社

この書の内容には、わたくしのこれまでのさまざまな見聞からもたらされたものもあり、研究の結果到達した考へもあります。またこれまでわたくしが逢つた多くの問題の子供から知つたこともあります。またわたくしが人の子の親としての失敗や悔恨の心から出てきたものもあります。しかし、いづれにしても、『かうありたい。』『ぜひかうなくてはならない。』といふことを多少とも学理の上から訴へたつもりです。(序より)



### 869 南進日本

茂野幽考 / 霞ヶ関書房

南へ！南へ！日本の眼は向ふ。本書は南方の研究家にしてその全土を巡視した著者がその体験から我等が白波を蹴立てて南に進まねばならぬ使命と、南方共栄圏の人情、風俗、風景から資源に及ぶ諸般の事情を手取るやうに面白い伝記や物語を取り入れて極めて平易に興味深く説いたもので、青少年男女の好読物である。(「人間ヒッター物語」巻末広告より)



### 876 勝ち抜く日まで

熊谷幸利 / 大地社

此の一篇は、余輩が国民新聞を通じて提唱し強調したものゝ一少部分であるが、拙きこの文章の中には以上の気魄を終始叩き込んで来た積りである。「戦ひは是からだ」を江湖の読者に再認識して貰ひ、さうして、明日への戦争に立ち向ふ新しい決意を固めて貰ふために、敢て大地社の翼めに応じた次第である。(序より)

## 882 日本精神發揚講演集

瀬尾芳夫 / 国民精神總動員中央聯盟

本書は昭和十四年二月五日国民精神總動員中央連盟主催の下に日比谷公会堂に於て開催の日本精神發揚大講演会に於ける平沼内閣總理大臣、荒木文部大臣、徳富猪一郎氏の講演を採録したものである。( p 30 より )



## 893 機械化の發展は土台から

中島武 / 国防同志会

国防の機械化は、次代の国民に譲るべき事ではなく、現在焦眉の問題である。故に茲に提唱したいのは、あらゆる機会を設けて、成人の再教育をなし、科学技術に対する理解力を高め、之を一般化することである。(原乙未生氏序より)



## 912 軍縮會議の決裂と帝国の海軍

大日本連合青年団 / 大日本連合青年団

昨年十二月九日より、倫敦に施て開催された軍縮會議は遂に決裂に終つた。會議は何故決裂したか、日・英・米・仏・伊五強国の主張の重点はどこにあつたか、決裂の責任はどの国が負ふべきか、更に決裂の結果は果してどうなるか、然らば我等は如何なる覚悟でこの時局に処してゆくべきか、これ等の諸点について、懇切な解明のうちに堂々帝国の所信を披瀝されたのが本書である。(編者識より)



## 983 大東亜戦争昭和十六年十二月八日

増永遥 / 研進社

『昭和十六年十二月八日は、日本国民の永遠に忘るべからざる日となりました。』(中略)

この歴史のうちの歴史の日、世紀最大の感激の日を永久に記念し、国民が大詔奉戴日ごとにこの日を回想して長期戦への耐久力を振起昂揚する糧に、この日の全記録を文書として国民に送りたい、といふ研進社の企画に感激して、私はこの書をまとめました。(序より)

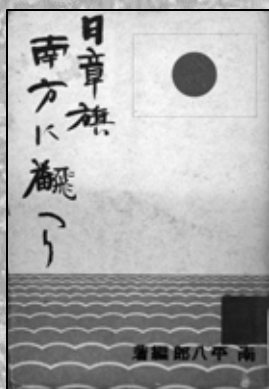




#### 984 三国同盟と日米戦

松尾樹明 / 霞ヶ関書房

英独決戦と支那事変処理の間にクローズアップされた米国の姿は今や国民注視の的だ。果して経済圧迫のみで済むだらうか？かの恐るべき建艦計画は何を意味するか？一朝火蓋が切られたとき、太平洋の争覇は如何に展開するか？空想に非ず、小説に非ず、百パーセントのスリルに富んだ作戦秘話だ！（「南進日本」巻末広告より）



#### 991 日章旗南方に翻へり

南平八郎 / 大新社

本書はシンガポール陥落までの輝かしき大戦捷を記録し、併せて皇軍の進撃路を追って各地の軍事的、政治的、地理的、経済的解説を行ひ、皇軍奮戦の跡を偲びつつ大東亜共栄圏の概念を把握せんとする人々のために、編述せるものである。（まへがきより）



#### 993 特派員決死撮影支那事変写真帖

読売新聞社 / 読売新聞社

「最前線に出るのは何時も読売の記者許りだ」との折紙を付けさせ、又銃後に於ては「読売に依つて初めて実戦の真況が分る」と定評を博するに至つた。（まへがきより）



#### 998 世界大戦を語る「ルーデンドルフ回想録」

ルーデンドルフ / 朝日新聞社

千九百一年一月、英女帝ヴィクトリアの崩御に明けた二十世紀の欧州は、その前半世紀の間に既に二度の戦禍に見舞はれた。第一次のそれは世界大戦に発展、第二次の大戦も、やがてまた全世界に及ぶこと必至の勢ひを見せてゐる。いな既に始つてゐるのだ。相違があるとすれば、十四年に始つた大戦は列強の世界政策の衝突からであり、三十九年に始つた今次の大戦は行詰つた欧州秩序の再編成であることだ。そして東亜に火の手の上つた支那事変に先行された新理論の展開であることだ。（緒言より）

### 1001 其の日の心得

荷見秋次郎 / 婦女界社

題して『其の日の心得』といふ。本書は現時局下に最も要望せられつゝあるところの女子に対する救護訓練の内容を、最も具体的に解説することを主眼とした。即ち今日の銃後に於ける国土防衛は防空の強化を期して初めて全しと謂ひ得るのであつて、いざ空襲といふ場合、若き女性も敢然この防空陣に参加して、或は学校報国隊防空補助員となり、或は各種防護団の一員として、或は家庭・隣組の中心となつて大いに活躍しなければならない。(自序より)



### 1023 陸軍少年砲兵

陸軍野戦砲兵学校 / 日本報道社

この本を読めばわかるやうに、少年砲兵はりつばな陸軍初級幹部としての訓練を受けるのはもちろん、特に砲兵の目ともいふべき、最も大切な観測関係の戦技について専門の教育を受け、この方面の第一人者として活躍するのである。(序より)



### 1041 海兵團

関口好雄 / 海国社

関口好雄君の著「海兵團」は、この我が海兵團生活を克明仔細に語り、戦時下の青少年諸君の奮起を促し、そしてその一人でも多くの入団を希望してゐる。この際、海兵團の何たるかを知り、世界に冠絶せる我が海軍伝統の精神力が、如何に育成されたかを知られるのには、まことに好箇の著書であると信じ、敢て本書を全国青少年諸君に推す次第である。(平出英夫氏序より)



### 1068 星と兵隊

原口氏雄 / 偕成社

装幀・挿絵 浅野貞美

著者が従軍中見聞せる天文現象の実戦への応用黄道光、流星と慧星、方位決定法、伝説等に亘り興味深く平易に述ぶ。(「空の艦長」巻末広告より)





### 1098 全国模範工場視察記

日本産業経済新聞社政経部 / 霞ヶ関書房

日本産業経済新聞社では、さきに当局の銓衡に基く全国二十三の模範工場に記者を派遣し、夫々工場に於ける生産管理、工場管理、労務管理の創意工夫を詳さに視察し、それを紙上に紹介し、生産増強への科学的指針を示されたが、今回これを一本にまとめ新装をこらして上梓されることは誠に時宜を得た試みであり、決戦下工場経営を担当する人々は勿論、そこに働く人々にとつても裨益するところ蓋し大なるものがあると信ずる。(岸信介氏序文より)



### 1128 グライダーの話

山崎好雄 / 彰考書院創立事務所

我が日本は国を挙げて大東亜共栄圏の建設の為に戦つて居ります。この大事業を為し遂げるのに、航空機が大きな役目を務めて居ることは誰も知つて居ります。グライダーも、その役目の一部を担つて居るのです。この本には、グライダーに就て主要な点だけを取り上げて、やさしく記してみました。(序より)



### 1129 海の読本 第1輯

日本機動艇協会 / 日本機動艇協会

日本は海に囲まれた国であり、海を護らなくては、その国防を全ふし得ないからであり、海を乗り越えなくては、その発展が望まれないからである。くはしいことは、この本に書かれたどの記事を読んでも、すぐ解ることと思ふが、兎に角、海への雄飛を志す人も、さうでない人も日本国民である以上は、もつともつと深く、正しく、しかも腹の底から「海」といふものを理解し、これに馴れ親むことが必要なのだ。(刊行のことばより)



### 1136 闘ふ火砲

中村新太郎 / 小学館

装幀 高澤圭一 挿図 植村茗次

いまや科学決戦いよいよ熾烈なるときにあたり、火砲について学ぶことは、青少年諸君にとつて必須のことでなければならぬ。本書は、これがために書かれた「火砲入門書」である。(原丈夫氏監修者のことばより)

### 1143 鉄牛と荒鷲

同盟通信社 / 同盟通信社

本書は、支那事変に於ける飛行機と戦車の活動を蒐録したもの。  
華かな勝利のかけに、幾多の難行苦行が秘められてゐることを見逃してはならない。(松村秀逸氏序より)



### 1164 現地報告農村総動員

東京朝日新聞社 / 東京朝日新聞社

本社は先般東京、大阪、名古屋、九州各本支社より全国各地に特派員を送り、増産計画遂行を中心とする実情を具さに調査し、その現地報告を紙上に連載したが、今回各方面の要望により集録して一書とした。本書が現下農山漁村の実情を知り、今後とらるべき対策の動向を窺ふ上に幾分でも寄与し得るならば幸ひである。(美土路昌一氏序より)



### 1188 開戦秘話マゼラン海峡突破記

佐藤新十郎 / 日の出書院

本書は大東亜戦争開戦直前、波高き大西洋に、平和的通商戦士として、決死的航海に従事した、邦船飛鳥丸以下二十数隻の偉大なる記録を中心に編纂せるものなり。(扉より)



### 1191 船員かく戦へり

日本海運報国団 / 太平洋書館

装幀 佐藤敬

その火の海、燃ゆる海を冒して、われらが皇国海員は航く。敵機の眼の間断なき追求と敵潜の虎視たんたたる海上、黒鉄ぶねを大き棺と観じ、海波を青き墓標と見て身を鴻毛の軽きにおく。職域直ちに戦死とつらなるこれら船員の位置は、他のあらゆる重要産業部門にも全くその比を見ぬ苛烈なるものである。灰燼業火の中より羽搏く不死鳥のごとき不屈不撓の精神力のみが、船員の鋼の脊梁を支へてゐるのだ。「海に生き海に死する」の形容をすでに現実は乗り越え、海に死することのみが船員の唯一絶対の海運報国道とはなつた。(序より)





### 1199 陣中漫画刻む軍靴

坂本守弘 / 昭和出版協会

戦友等は私を生きた写真機だとか、漫ちやんとか、色々な言葉を沿せて激励してくれました。全く私としては野心的でないスケッチを続けたと言ひたい処です。『砂山』の戦の時などは、休養の時間にスケッチして居ると、突如、麦畑の中の敵から狙撃を受けたことも、再三あつた。(後記より)



### 1201 陣中漫画・スケッチ養風呂

三上卯之介 / 三友社

装幀挿画 三上卯之介

到底戦地で絵等をかいてゐる暇はないと思つた私は、出発の際スケッチブック一つ用意はして行かなかつたのですが、戦争といふ一大事実に直面して、私はどうしても描かすには居れない衝動にかられ、あり合せの日記帳やメモに鉛筆を走らせた。その後筆と墨を手に入れたので、それから絶えずこれを腰にして壕の中でも、進撃中でも暇さへあればスケッチをし漫画をかいた。(本書の始めにより)



### 1203 写真報道学鷲

朝日新聞社 / 朝日新聞社

本書にはこの優秀なる搭乗員の重要な一翼をなしてゐる予備学生の訓練状況が詳細に記録されてゐる。この記録によつてわが勇猛なる荒鷲が如何に育まれてゆくかを知悉されんことを切望するものである。(栗原悦蔵氏序文より)



### 1206 独逸国民と音楽生活

津川主一 / 新興音楽出版社

表紙カバー アクスター・ホイトラス

終りに、独逸に於ては音楽は、文化や芸術の域を踏み越えて、立派な一つの産業として成り立つてゐることを語つてみたいと思ふ。すでに記した、演奏会、歌劇、音楽祭、音楽教育機関等によつて、独逸国家が外貨を獲得した額も、相当な数字として示されようが、その優秀なる経験と技術とにより、全世界を市場とした楽器製造と、楽譜出版とによつて、年年獲てゐた金額は実に莫大なものと考へられる。(本文より)

### 1225 従軍歌集山西前線

小泉荻三 / 立命館出版部

挿絵 加納辰夫

立命館大学教授ポトナム短歌会主宰小泉荻三氏は夙に歌人として名あり。去歳歌壇唯一人の従軍歌人として挺身軍に従ひ、北支中支に及ぶ。その間つぶさに将兵義烈の跡をたどり、将兵とともに前線の危険に身をさらす数次。しかも、和歌をもつて従軍日日の感慨を叙し、戦闘の状況を活写せり。(板垣征四郎氏序より)



### 1228 大東亜戦争傷痕軍人歌集御楯

佐佐木信綱ほか / 千歳書房

本書は、支那事変、大東亜戦争に於いて傷痕を受け、内遺療養にあたられてゐる陸海軍傷痕軍人諸士が、出征より現在に至る間、身を以て経験せられたる聖戦を詠みいでられた作品を輯め、以て皇軍の忠烈を伝へ、併せて擴古の聖業を伝ふる資料の一端ともしようとしたもので、(中略)約四千首を選択輯録したのである。(伊藤嘉夫氏まへがきより)



### 1232 乃木將軍詩歌物語

高須芳次郎 / 新潮社

本書は、その詩歌の粹を抜いて年代順に配列し、その出所、動機、内容、精神を明かにすべく、解釈鑑賞の両方面からこれに触れた。乃木將軍詩歌傑作集であると共に、私の長い間の希望だつた新しい形式の將軍伝たることを得ば、本懐これに過ぎない。(序より)



### 1251 防諜劇名作選

三谷節次 / 協栄出版社

本書は昭和十七年第一回防諜週間に際し、東日、東朝、大毎、大朝、読売の五新聞紙の協力を得て、広く全日本より募集せる二千数百余点の応募原稿を、防諜協会に於て百余点を内選し、是を情報局、日本放送協会に委嘱し、厳正なる審査を遂げたるも、国民防諜啓発上、並に放送劇用としては意に満たざるもの甚だ多く、辛じて佳作優秀と認めらるゝもの十点を得たり(内「愛国かるた」は同年七月十八日東京中央放送局より全国向け放送)(序文より)







### 1276 空征く御楯

大河内敏夫 / 帝国出版  
装釘・挿絵 高橋春人

この小著は、一年有余の従軍体験にもとづいて書いたものです。(中略) 壮烈な戦記の幾篇かについても書きましたが、はなやかな荒鷲たちの戦果のおかげに、黙々と働いてある協力部隊の姿を特に詳しく述べたつもりです。じつさい、整備兵、移動修理班、対空無線班、飛行場設定隊などの昼夜をわかため活躍は涙ぐましいものがあります。(あとがきより)



### 1293 皇軍百萬

木村毅 / 興亜文化協会  
装幀 田村宗太郎

これは例の杭州湾の敵前上陸の後であげられたアドバルーンから思ひついて題とした。つまりその皇軍の陸に、海に、空にの各方面の活躍を描いてあるからである。

別に私には『戦火』(講談社発行)と題する小説集がある。この書の姉妹巻をなすものだから、興味のある人は併せてよんで下さい。(序より)



### 1306 戦死

柴田賢次郎 / 甲鳥書林

本書は上海戦線から南京へ、徐州戦線から漢口攻略戦に散った私の戦友の戦死の生々しい思ひ出を綴つたものであるが、その一部は帰還早々少し発表したのをまとめて今度新に出すことにした。

この本にまとめたのは戦友の死のほんの一部で全部ではない。然し戦死した戦友の戦死に対する観念はいろいろと異つてみたやうだ。それを私は出来るだけ観察して見たつもりである。(後記より)



### 1440 民族の凱歌

榊原孝ほか / 日本青年文化協会

こゝに一本として纏めたものは、或ひは一片の旅行記であり、通りすがりの見聞であるかもしれない。しかもその見聞は、独逸の実相の一端以上ではないかもしれないし、その判断には正鵠をかく点もあるかもしれない。しかし、この眼で見、この耳でき、この心で感じたありのまゝの姿であることに間違ひはない。(序にかへてより)

## 1475 馬と特務兵

田村元劬／教材社

装幀・挿絵 田村元劬

本書の内容には、機械化の進歩した近代戦に於ても道路網の極めて不完全な地域には、軍馬の必要は益々増加するものであることが自然と分る様に示されており、又軍馬が兵站輜重としても策戦上極めて重要な任務を遂行する、隠れたる功績を称へる意義が明かにされてあるのは誠に愉快に堪へない。(橋本庄太郎氏序文より)



## 1480 南海封鎖

津村敏行／海洋文化社

装幀 中村研一

本書は戦陣匆忙の間、著者が折に触れ、時に感じて物した断片を輯録した貴重な体験の記録でなかなか名文である、中には東京から朗読放送されたものもある、忠烈なる将士の活動、花も実もある若い武人の心情、心を打たれるところが多々ある。(谷本馬太郎氏序より)



## 1509 麥と兵隊

火野葦平／改造社

装幀 中川一政

私は、戦争について語るべき真実の言葉を見出すといふことは、私の一生の仕事とすべき価値のあることだと信じ、色々な意味で、今は戦争については何事も語りたくはないと思つてゐたのです。しかしながら、又、別の意味で、現在、戦場の中に置かれてゐる一人の兵隊の直接の経験の記録を残して置くことも、亦、何か役に立つことがあるのではないかと考へ、取りあへず、ありのままを書き止めて置くことに致しました。(前書より)



## 1518 或る職長の手記

真下五一／大阪新聞社

装幀 瀧秋方

月夜に闇夜があるやうに、あらゆるものに表と裏とがあるといはれるが、今日の国民勤労生活の中から、といふよりは、その一人一人のこころの中から、一切表裏の別がなくなつたら、どんなに明朗に国力が昂揚されることだらうと、最も重要な生産部面について、あたふかぎり現場的に、具体的に、反省の余地あるところを指摘してみたのが、この著の一つの目的であるが、これが今後の道において、少しでも啓蒙するところあらば幸である。(あとがきより)





### 1532 愛の進軍

森田松子 / 秋豊園出版部  
装幀 野口良一呂

日赤香川支部病院勤務の看護婦森田松子さんの「愛の進軍」の一篇は、今次事変に夥しく出た現地報国文学の中でも繊弱き一女性が祖国愛に燃えつゝ、敵大軍包囲の中にあつて空襲と敵砲弾に暴され、あるひは伝染病の真ただ中に白衣の天使として命をかけての傷病兵看護と支那難民救護に活躍した「上海特別救護班」の粉飾なき手記だ。(清水保雄氏序より)



### 1540 ジャカルタ記

横山隆一 / 東栄社

しからばその横山君が、ほんものの戦場に徴用されて如何なる使命を果たしたか。それには、一応宣伝班といふものの性格を知らねばならない。第一は対敵宣伝、第二には対占領地宣伝、第三は対軍隊宣伝 横山君も、だからそういった面でジャワ全島を独楽鼠のやうに駆け廻つて仕事をして来た。身につけた技能を十分に生かして聖戦に奉行するといふことは、誰しも愉快的ことに違ひないが、この著は、そのフクちゃんの場合に於ける戦闘報告書である。(町田敬二氏序より)



### 1542 真珠湾潜航

読売新聞社出版部 / 読売新聞社  
装幀 内藤良治

宣なるかな！この筆者こそは、真珠湾攻撃をはじめ、幾度かの大海戦に参加激闘せる某大尉であり、魚雷を抱き鉄把を握つたその手で記述せる文字通りのわが戦記であるのだ。(平出英夫氏序より)



### 1546 日本出征学生の手紙

革新社 / 第一公論社  
装幀 鶴田吾郎

申すまでもなく此等の手紙は、或る種の戦争文学などの如く、色々な方面への影響を顧慮して有意的反省的に作為され、文飾された作品ではなく、一通一通が遺書のつもりでそして実際に遺書となつたものもすくなくからずあるのであります その生々しい体験をぶつつけに家族や師友に書き送つた魂の真実の記録であります。(編者序より)

## 1562 我らかく戦へり

ヘルベルト・ウーフェン / 蒼生社

装釘 細島昇一

本書は、独逸陸軍、海軍、空軍の凡ゆる兵科の兵隊の、勝利から勝利へ、潮の如く殺到する英雄的戦闘の様相を、正しく、面白く、且つ平易に記録したものである。(クレツチユマー氏推薦の辞より)



## 1566 ロンドン爆撃

シュタッケン・ベルグ / 田中宋栄堂

装幀 宋栄堂編集部 挿絵 松野一夫 (一部は原画より)

この独逸大戦記は、独逸の軍当局が特に材料を提供して、軍人なり作家なりに書かせたもので、独逸の国策出版社から発行された唯一の叢書である。監修者はその中から適当と思へるものを選んで編集した。われわれの概念からいふと少し文学的に偏したやうな思ひもするが、熟読するとそこに躍動する独逸魂と、戦闘の実感なり特長なりが確然と現はれてゐる。殊に機械の操縦に至つてはさすがに天稟の才能が観知される。(監修者序より)



## 1570 戦車旅団全滅

マキシム・ホーソン / 新興亜社

この手記は、ソ連将校の描いたノモンハン実戦記である。筆者マキシム・ホーソンは嘗てモスコで新聞記者をしてゐたが、国境の風雲急を告げるに至つて中尉としてソ満国境警備に就いた。最初は歩兵を指揮してゐたが、後に戦車中隊を指揮したのである。(富田邦彦氏訳序より)

